

# 師走の大掃除とガリ版刷り

神原 勝

師走恒例の大掃除だが、この年齢になれば人生の大掃除の意味合いも濃くなる。ダンボール箱に放り込んでいた昔の書類などは思い切つて処分することになっている。だが、ときには懐かしいものを発見してしばし手が止む。

今年も学生時代に読んだH・J・ラスキの『政治学大綱』のコピーがでてきた。コピーといつても今日とは大違い。ロウを塗つた原紙に鉄筆でガリガリと本を書き写し、これを謄写版で印刷した、いわゆるガリ版印刷である。

ラスキは多元的国家論で有名なイギリスの政治学者。二〇世紀の政治学に大きな影響を与えた。日本でも一九五〇年代に多数の翻訳が出版され、そのなかに代表的著作である『政治学大綱』（原題はA Grammar of Politics、一九二五年、横越英一訳、法政大学出版局、一九五二年）があった。ガリ版印刷にしたのはこの邦訳本の下巻にある「第八章 政治制度」のなかの「一〇 地方政治の諸原則」で、教科書版で三五頁ほどの分量がある。

一九六〇年代の初め私は学生であった。松下圭一さんや嶋海正泰さんが「地域民主主義」「自治体改革」を唱えて自治体理論をつくりはじめたところである。だから、地方自治に関心をもった私たち学生が、ビギナーらしい純真な気持ちから「なぜ自治体は必要なのか」などと問うても、民主政治と地方自治の視点で、

わかりやすく応えてくれる理論や書物はほとんどなかった。そんななか、目からうろこが落ちる思いで読んだのがラスキだった。

すすめてくれたのは政治学者の大原光憲さんだった。複写した理由は、学習会の全員が急いでこの本を読みたかつたことと、上製本は高価で学生が各人で求めるのは無理だったからである。訳者があとがきか何かで、ラスキの文章はあまり上手ではなく翻訳に苦労したと述べるほどだったから、学生にはなおさら難しい本だった。それでも、当時、赤線を引いて読んだ箇所を拾い出してみると、順は不同だが、こんなことが書かれている。

まず、哲学者の頭のなかにしかないような曖昧な国家という概念は、市民の代表として行動する政府と市民の関係という重要な問題から目をそらしてしまっておそれがある。人々の日々の生活に関係する国家とは実は命令を発する一団の人々（中央政府のこと）である。したがって、民主政治においてはその命令が関係する範囲と権力の濫用を防止するための手段にこそ関心をはらわなければならない。

次いで、自治体がなければ中央政府がどうなるかを指摘する。極端な中央集権になると議会は地方に関して細かな決定はできないから、官僚任せになり官僚制が肥大化する。その官僚は本質的に世論に疎いから、市民を代

表する政治が損なわれる。また、中央官庁が本来の仕事をするうえで欠かさない、地方的な知識と利益の源泉を失う。自治体が仕事に失敗しても危険は小範囲にとどまるが、国が失敗すれば影響は広範かつ甚大になる。

自治体政治の原則については次のようにいう。自治体とその政策を制御できるようにする唯一の方法は、代表者を直接の選挙で選ぶことと彼らに報酬を与えることである。無給なら代表者は圧倒的に社会の富裕階級の代表者になつてしまう。選挙された代表者はアド・ホックではなく諸機能全体を管理・監督すべきで、そうしなければ財政全体を大観できなくなる。自治体間には共通の課題を解決するための協力の余地を残しておく必要がある。

ほかにも、中央政府の干渉が少ないほど政策の質があがるとか、地方自治には市民に政策関心をもたせる教育的効果があるなどの重要な指摘が多々ある。これらをふくめて私たちはラスキから地方自治の必要について多くを学んだ。後になって、国政レベルで民主政治が完全実施され、官僚が真心を込めて地域行政にあたれば地方自治は不要になる、といった親身の行政論に遭遇したときも、ラスキ効果が素早くその虚構性を見抜くことができた。

あれから五〇年、いまはもうラスキに頼らなくてもよくなつてきている。松下圭一さんは、理論構築の初期にラスキに正面から向き合つて、ラスキが提起した重要問題を「分節政治理論」と「自治体理論」に受容し、より体系的、論理的に再構成した。ただし、これは私の推測である。私の頭のなかで松下理論とラスキの言説はしばしば重なり合う。

へかんばら まさる・北海道大学名誉教授／当研究所顧問